

トビウオ通信 (R4 第9号)

(本誌はホームページでもご覧いただけます。ホームページにはバックナンバーもあります。)

<https://www.pref.shimane.lg.jp/suigi/> (TEL 0855-22-1720)

《令和4年夏の漁況を振り返って》

島根県の夏の漁業として代表される、ばいかご漁業、しいら漬け漁業、とびうお漁について、令和4年夏の漁況を振り返ってみます。なお、平年値は過去5年平均（平成29年～令和3年）を用いています。

ばいかご漁業 1隻当たり漁獲量 平年をやや上回る

石見地域のばいかご漁業は小型底びき網漁業の休漁期（6月～8月）に、日御碕沖から浜田沖の水深200m前後の海域で操業されています。

今期のばいかご漁業における総漁獲量は77.4トンで平年の1.2倍、1隻当たり漁獲量は24.8トンで平年の1.2倍でした。漁獲の主体は、エッチュウバイ（地方名：白バイ）が74.4トンで91.5%を占めていました。

平成10年～平成20年にかけては、エッチュウバイ漁獲量は60トン～120トンの間で大きく変動していましたが、平成21年以降は一部を除いて50トン～70トンの間で概ね横ばいとなっています。1隻当たり漁獲量は増加傾向にあり（図1）、現在のエッチュウバイ資源の状況は良好であると推定されます。

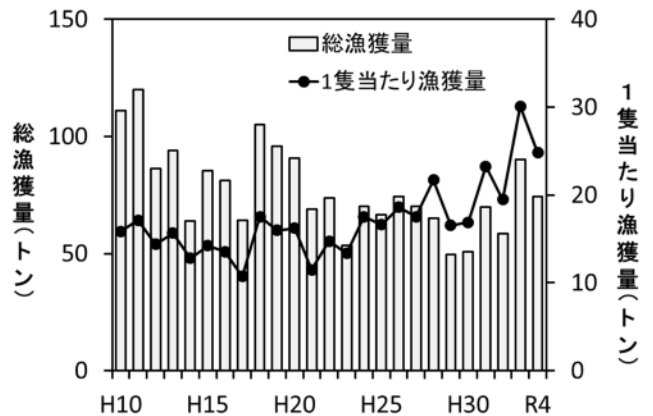


図1 石見地域のばいかご漁業におけるエッチュウバイの漁獲量および1隻当たり漁獲量の推移

しいら漬け漁業 1隻当たり漁獲量 平年を下回る

シイラ等の回遊魚は物陰に寄り添ったり、集まったりする習性があります。この習性を利用した漁法がしいら漬け漁業で、漬木（つけぎ）と呼ぶ竹の筏を海面に浮かべ、筏の影に集まった魚を網で漁獲するまき網の一種です。本県では、主に小型底びき網漁業の休漁期に石見地域で行われます。

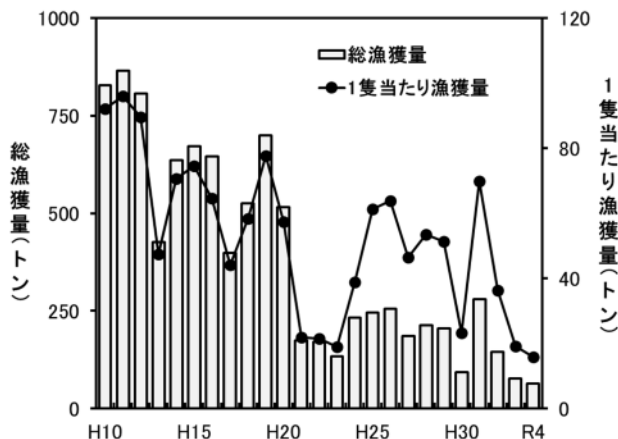


図2 石見地域のしいら漬け漁業の総漁獲量および1隻当たり漁獲量の推移

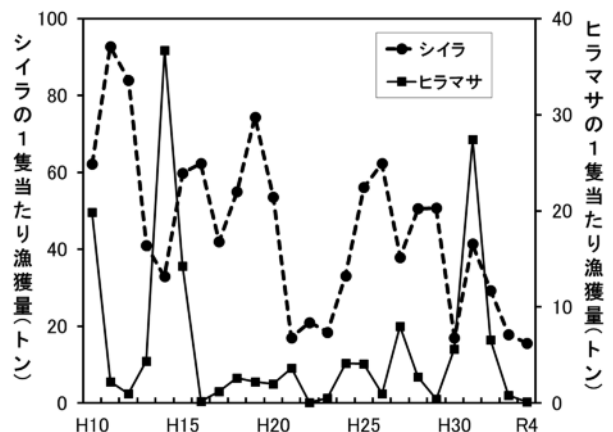


図3 石見地域のしいら漬け漁業のシイラとヒラマサの1隻当たり漁獲量の推移

今期（6月～9月）の石見地域における水揚げ状況は、総漁獲量が63.8トンで平年の4割、1隻当たり漁獲量は16.0トンで平年の4割となりました（図2）。

魚種ごとの漁獲動向をみるとシイラの1隻当たり漁獲量は年変動が大きく、多い年では60トンを超えていましたが、今期は過去最低となる15.6トンでした。一方、ヒラマサの1隻当たり漁獲量は平成14年に36.7トンの漁獲があった以降、令和元年を除いて低調に推移しています。今期の1隻当たり漁獲量は159kgで平年の1割未満となり、近年でも特に不漁となりました（図3）。

とびうお漁 漁獲量 平年並み

トビウオ類は、初夏になると産卵のため山陰沿岸に回遊してきており、県下全域で刺網、定置網、船びき網、まき網などの様々な漁法により漁獲されます。本県で漁獲されるトビウオ類は、主にツクシトビウオ（地方名：角アゴ、角トビ、大目）とホソトビウオ（地方名：丸アゴ、丸トビ、小目）の2種類です。

今期（5月～8月）におけるトビウオ類の総漁獲量は501.5トンで、平年並みとなりました（図4）。また地区別では、出雲地域が348.8トン、石見地域が108.4トンでそれぞれ平年並み、隠岐地域が44.3トンで平年の8割の水揚げでした。

主な漁業種類別の漁獲量は、定置網が444.8トン、とびうおまき網が32.6トン、刺網が8.0トン、船びき網が13.4トンでした。また、魚種別の漁獲量は、ホソトビウオが318.4トン、ツクシトビウオが183.1トンで、ホソトビウオが多く漁獲されました。

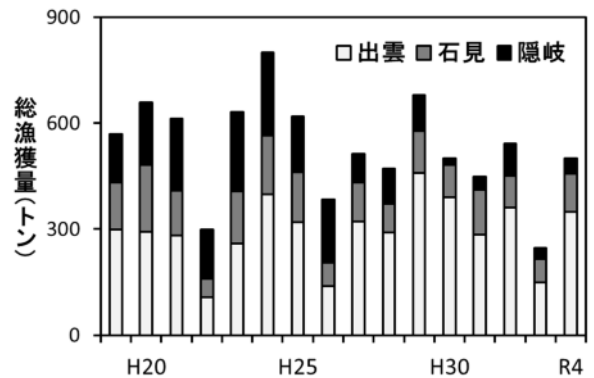


図4 トビウオ類の地区別漁獲量の推移 (5～8月集計)

その他のトピック

例年、夏場はほとんど漁獲されないウルメイワシが、7月にまき網漁業で約9,000トン漁獲されました。令和4年9月時点におけるウルメイワシの総漁獲量は約13,500トンとなり、過去5年間同期の漁獲量と比較すると最も豊漁となりました。

また、島根県の夏の漁業として昨年まで紹介していた「あなごかご漁業」については、今年度は1隻のみで操業していることから、掲載を取りやめました。

〈ちょっとコラム〉： 島根県の魚 トビウオ



トビウオ(ツクシトビウオ)



あご出汁

平成元年9月24日に「第1回島根県豊かな海づくり大会」で島根県の魚がトビウオであることが発表されました。

島根県では夏を告げる魚として親しまれており、海面を飛び出し、滑空する姿が飛躍・躍進をイメージさせます。

刺身、フライ等で食べられるほか、県の特産品として「あご野焼き」、「あご出汁」等が販売されています。